

# 主論文の要約

(Abstract of Dissertation)

論文題目：目標設定を取り入れた多読活動における英語学習者の動機づけモデルの構築  
(Formulating a Model of EFL Learners' Motivation in Goal-Setting Integrated Extensive Reading)

氏名：三上 由香

論文内容の要約：

本研究の目的は、量的研究と質的研究の併用により、英語授業において目標設定を取り入れた多読活動に参加した学習者を対象として、目標設定と動機づけの関係を明らかにすることである。具体的な研究課題は以下の5つである。

- (1) 目標設定を取り入れた多読活動に参加した学習者を対象に、3つの目標の要素（目標の具体性、目標の難度、目標に対するコミットメント）、内発的動機づけ、自己効力感に関して、モデルの構築と検証を行う。
- (2) 上記5つの要素の高低にパターンはあるのか、またパターンがあると仮定すると、どのようなパターンの違いがあるのかを検証する。
- (3) 多読活動において学習者がどのように目標を設定していたのかを明らかにする。
- (4) 多読活動において目標はどのように活用され、どのような効果をもたらしたのか。目標設定が学習者の動機づけに影響を及ぼす過程を明らかにする。
- (5) 量的・質的研究の両方の結果を踏まえて、目標設定から動機づけに対する影響を明らかにし、モデルの構築を行う。

これらの研究課題を明らかにするために、調査1の量的研究と調査2の質的研究を実施した。調査1は研究課題 (1) と (2) を、調査2は研究課題 (3) と (4) をそれぞれ扱い、これらの両方の結果に基づいて研究課題 (5) を総合的に検討する。

第1章では、第二言語動機づけ研究の歴史的な発展を踏まえて、本研究では、動機づけに影響を及ぼす要素として目標設定に注目し、動機づけ理論である目標設定理論に基づいて、目標設定が動機づけに及ぼす影響を明らかにすることについて論じた。

第2章では、目標設定理論について説明し、効果的な目標設定にとって重要な3つの要素（目標の具体性、目標の難度、目標に対するコミットメント）について述べた。目標設定は、内発的動機づけや自己効力感に影響することや、自己調整を促進することを指摘した。また、多読の特徴と効果を詳述し、多読における動機づけの重要性について述べ、特に内発的動機づけと自己効力感が重要であることを指摘した。これらの議論を踏まえて、目標設定を取り入れた多読活動を実施し、目標設定は内発的動機づけと自己効力感の向上につながるのかを調査することとした。

第3章では、量的アプローチにより、目標設定、内発的動機づけ、自己効力感の関係を検討した(調査1)。参加者は、著者が担当する必修科目の英語授業を受講する経営学・経済学専攻の大学1年生130名(男子92名、女子38名)であった。2012年4月から7月に2クラス、2013年4月から7月に2クラス、2014年4月から7月に1クラスの合計5クラスからなった。これらのクラスにおいて、毎週1回90分の授業で多読活動を20分間実施し、合計12回の多読活動を行った。学生は、教室に準備されたgraded readersやleveled readersから好きな本を選んで、自分のペースで20分間多読活動に取り組んだ。毎回の多読活動において、活動開始前に目標として読む量(語数)を学生自らが設定し、活動終了後に読語数を確認して、目標と照らし合わせて活動に関する自己評価を記述した。データ収集に関しては、目標に関する質問紙と動機づけに関する質問紙を作成し、すべてのクラスで多読活動の最終日に調査を行った。

まず、研究課題(1)に関して、3つの目標の要素、内発的動機づけ、自己効力感の関係を明らかにするために、共分散構造分析を用いてモデルの検証を行った。3つの目標の要素に関して、特に目標の具体性と目標に対するコミットメントの間に強い相関が見られた。すなわち、目標が具体的な学習者は、その達成に向けて熱心に取り組んでいたことが示された。また、目標の要素のうち、目標に対するコミットメントだけが、内発的動機づけと自己効力感の両方に直接的に影響することがわかった。すなわち、目標達成に向けて熱心に取り組むことは、内発的動機づけと自己効力感の向上につながることを示された。加えて、目標の難度は内発的動機づけのみに直接的に影響する一方で、目標の難度から自己効力感への直接的な影響はなく、これらの関係については、これらの要素の高低のパターンを検討する必要があると指摘した。目標の具体性に関しては、目標に対するコミットメントを介して内発的動機づけと自己効力感に間接的な影響を与えると解釈した。

次に、研究課題(2)に関して、クラスター分析を用いて、5つの要素(3つの目標の要素、内発的動機づけ、自己効力感)に基づいて学生を似たような特徴を持つグループに分類し、それらの要素の高低のパターンを詳しく分析した。その結果、グループ内のメンバー同士は同じような特徴を持つ4つのグループに分類された。これらの4つのグループの中には、目標の具体性、目標の難度、目標に対するコミットメントのすべての要素が高く、動機づけの要素も高いグループや、逆に、目標の要素が低くて、動機づけの要素も低いグループが見られた。また、すべての要素において高くも低くもないグループも見られた。すなわち、これらの3つのグループは、目標の要素が高くなれば、内発的動機づけと自己効力感も高くなるという傾向にあると指摘した。一方で、もう1つのグループは、難しすぎる目標を設定して、自己効力感を下げてしまっている可能性が確認された。すなわち、このグループは、高すぎる目標を設定して、目標達成ができなくて、自己効力感を低下させてしまったと解釈した。

第4章では、質的アプローチにより、目標設定の活用とその効果に関して検討した(調査2)。対象クラスは、量的研究に参加したクラスの1つであり、2014年4月から7月(前期)まで毎週1回90分の授業において多読活動を20分ずつ12回実施し、引き続き10月から12月(後期)まで10回実施し、合計22回の多読活動を実施した。後期授業では、毎回の授業で前期授業と同様の活動を行った。加えて、前半と後半に分けてそれぞれ5週間にわたる長期的な目標を学生自らが設定して、その自己評価も行った。参加者については、比較事例の選出を採用し、目標達成率を一つの基準として、目標達成率が高い学生2名と低い学生2名を選び出した。質的データは、半構造化インタビューを中

心として収集された。インタビューは7月と翌年1月に授業時間以外で個別に行われ、各インタビューの長さは20-30分間であった。インタビュー・データは、ICレコーダーを使ってすべて録音し、文字化した。また、インタビュー・データに加えて、参加者4名の自己評価シートの記述もデータとして使用した。

研究課題 (3) に関して、Miles, Huberman, and Saldaña (2014) に基づく質的データ分析の結果、設定した目標をまとめてみると、達成できそうな限界に近い挑戦的目標、スモールステップの目標のような達成できそうな目標、現状を維持するための消極的目標、より長い期間にわたる長期的目標、達成できないような高すぎる目標の5つに分類された。また、4人の学生全員において、1年間にわたる多読実施期間を通じて設定する目標は変化していることがわかった。目標達成率が高い学生は、状況に応じて目標を調整しながら設定しているが、目標達成率が低い学生は、目標の調整がうまくできなかったようであった。さらに、研究課題 (4) に関して、目標達成率が高い学生は、効果的に目標を活用し、その達成に向けて熱心に取り組むことによって、目標達成を繰り返し経験しながら多読活動への自信や意欲を高めていた。一方で、目標達成率が低い学生は、目標達成に向けて熱心に取り組もうとする様子が見られず、目標達成をあまり経験できずに、よりたくさん読もうという意欲は向上していないようであった。すなわち、目標を効果的に活用できるかどうかで、動機づけは高まったり、高まらなかったりすることを指摘した。

しかし、目標達成率が低い学生でも、目標達成率が高い学生と同様に、目標を達成できた時には達成感を感じていたと述べており、意欲の向上が全く見られなかったわけではなかった。それゆえ、学習者の動機づけを高めるためには、目標達成による達成感を感じるということが重要であると述べた。これらの分析を踏まえて、研究課題 (4) に関して、目標設定が学習者の動機づけに影響を及ぼす過程を示した。この過程に基づく、目標を効果的に活用できた場合は、目標達成による達成感を感じて内発的動機づけや自己効力感が高まり、新たな目標の原動力となることが示された。一方で、目標を効果的に活用できなかった場合は、目標を達成できなくなってしまい、自己効力感を低下させる危険性があることが示された。

第5章では、第3章の量的研究の結果と第4章の質的研究の結果を踏まえて、これらの両結果を統合したモデルの構築を行い、目標設定から動機づけに対する影響について総合的に考察した。このモデルによれば、目標設定から動機づけへの肯定的な影響とさらなる新しい目標への好循環が示された。しかし、この好循環を生み出すことができずに、自己効力感の低下につながる危険性も示された。また、クラスター分析により4つに分類された学習者グループについて、それぞれの特徴を目標設定から動機づけに対する影響に関するモデルを用いて改めて検討した。それにより、モデルに示された目標設定による好循環が生じている状態とそうではない状態が見られると解釈できた。このような目標設定から動機づけに対する影響の違いについて、学習者によって自己調整の知識やスキルが異なることが深く関わっている可能性があることを指摘した。

最終章となる第6章では、本研究で得られた成果をまとめ、教育的示唆、ならびに今後の課題について述べた。これらの成果から、多読において学習者はできるだけたくさん読むことを目指すよりは、より具体的な目標を達成することを目指す方が、動機づけを高めることにつながると考えられる。一方で、学習者の自己調整の知識とスキルの違いにより目標設定の影響は異なる可能性もあり、多読活動に目標設定を取り入

れて、学習者が目標設定を効果的に活用できるような学習経験を提供する必要があると述べた。最後に、今後の課題として、どう指導をすれば、動機づけへの好循環を生み出すことを支援できるのかを探ることや、目標設定が学習者のパフォーマンスに及ぼす影響も検討する必要があることが示された。